

Y6-08

日赤と臨床心理士とのコラボによるこころのケア活動（速報）

日本赤十字秋田看護大学 看護学部¹⁾、
秋田赤十字病院²⁾、
室蘭工業大学³⁾、
伊達赤十字病院⁴⁾、
日本赤十字社 医療センター⁵⁾、
日本赤十字社 岩手県支部⁶⁾、
日本赤十字社 看護部⁷⁾
齋藤 和樹^{1,2)}、前田 潤^{3,4)}、槇島 敏治⁵⁾、
阿部 幸子⁶⁾、東 智子⁷⁾

【目的】東日本大震災において日赤の「こころのケア」を展開するにあたって、日赤は日本臨床心理士会や地域の臨床心理士会と協働するという初めての試みを行った。この協働が日赤の「こころのケア」活動に与えた影響について日赤岩手県支部内の「こころのケアセンター」を事例にして検討する。

【経過】岩手県支部では、4月10日に「こころのケアセンター」を立ち上げ、宮古・山田地区、釜石・大槌地区、陸前高田地区の3つの地域を拠点に活動を展開している。臨床心理士は、5月末現在でのべ36名が日赤のボランティアとして医療救護班または「こころのケア」班と一緒に行動して来ている。

【影響】「こころのケア」要員の活動日程は4泊5日を基本としているが、臨床心理士の中には、このスケジュールでの参加が難しい人が多いため2泊3日での活動が行われるなど、柔軟なスケジュールが組まれることになった。日赤の「こころのケア」要員のなかには、医療救護班員として一日研修を受けただけのもも含まれているため、自分たちができるだろうかとの不安もあったようだが、臨床心理士という心の専門家と一緒に活動することによって、安心して活動ができたという声がある。

【考察とまとめ】今回の大震災では、日赤の「こころのケア」活動にも大勢の人員が必要とされた。その時に臨床心理士と協働することによって、人員の確保ができた。また、臨床心理士側からも日赤から車両や宿舎の提供を受けたので活動できたとの評価がある。相互補完的に活動できた意義は大きいと考える。

Y6-09

救護班に対する心理的支援体制について
～初動班員の心理的变化を通して～

神戸赤十字病院 看護部
菊川 佳代、葛嶋 元子

【はじめに】今回、3月11日に東日本大震災という未曾有な大災害が発生した。私は兵庫県支部からの要請を受け、発災4時間後にこころのケア要員として初動班で出勤し、5日間の救護活動を終えて帰還した。私は初動班として出勤して、悲惨な現場を目撃したり辛い話を聞いたり、自らの生命の危機を感じるなど、通常業務と比べて精神的負担が非常に大きく、また活動期間に制限がある中、不全感と無力感を感じ心理的にもダメージを受けることを実感した。近年、救援者のこころのケアの必要性が言われている中、当院では救援者のこころのケアに対して、いつどの時期にどのように救援者のこころのケアを行うかなどのシステムが構築されていない。自分自身で救援者の心の変化を体験し、改めて救援者のこころのケアの必要性を感じ、早期にシステム化を行う重要性を感じた。

【目的】災害救護活動に従事した初動班員の心理的变化を調査し、早期にこころのケアの介入を行うために実態を明らかにし、介入方法や時期を検討する。

【方法】初動班として出勤した13名に対し学会以外の目的で使用しないことを説明し承諾を得て、災害発生後から出勤から帰還後の心理状態の聞き取りを行った。

【結果】身体的変化は「倦怠感や疲労感などの1～2日休息すれば消失する」とあり、心理的ダメージについては、自分自身の生命の危機を感じたことが最も強く「早期に同じ境遇で同じ体験をした班員と話がしたい」との意見が聞かれた。

【考察】心理的ダメージについては、同じ状況下で活動をした班員と話をする事で軽減につながる事がわかり、身体的な休養期間を含め、帰還3日後までにこころのケア要員が中心となり、初動班全員で活動中についてポジティブ言動で対話する場を設けることが必要である。